2015 年 5 月 29 日（金） 於：一橋大学 佐野書院
第 30 回 国立大学日本語教育研究協議会 報告
西口光一氏 「カリキュラムの革新と実践の創造―基礎と中級の教育を例として」

30 年余りの間日本語教育に携わって来られた西口氏は、まず、日本語教育における教育内容についていくつかの課題を挙げられた。1）基礎(初級)日本語教育が硬直した状態であること、つまり学術的な基礎研究が不足していることにより、圧倒的に文型・文法事項が中心に扱われてきたこと、2）それに続く教育が無政府状態であること、そして3）アーティキュレーション、つまりレベル間の連続性、連携がうまく効果的に行われていないことの 3 点である。また、教育方法については、第二言語習得と習得支援についての理論がないこと、そしてデザイン思考に基づくプラニングがないことなどが課題であることを指摘、言語フェチでも、言語フォビアでもない、言語モデ（モデレイト）に則ったカリキュラムの革新を提唱された。

その革新的な試みとして、2012 年に出版された『NEJ テーマで学ぶ基礎日本語』において西口氏は、テーマについて自分の話ができるようになることを目標とした自己表現活動を中心に、そのテーマの中核となる「マスターテクスト（登場人物がする話）」を覚え、それをモデルに自分の話をするマスターテクスト・アプローチを用いた画期的プログラムを開発された。そのマスターテクストを習熟すると初級の文法文型・語彙が自然と習得できるよう構成されている。別冊に「ひらがなシート」「カタカナシート」「漢字シート」「文法シート」が付属されており、一冊で全てまかなえるよう構成され、音声は WEB よりダウンロードができるようになっている。一つのテーマに基づくユニット授業のスキームとして、ナラティブ１、２、3のそれぞれが、＜ステップ１＞理解活動→＜ステップ２＞模擬活動→＜ステップ３＞質疑・応答活動→＜ステップ４＞質問・答え活動の学習プロセスをそれぞれ経て、文法、漢字、語彙の学習を行った後、最後エッセイを準備、作成し、学習間でコメントをし合い、指導者が最後評価をするという 1 課の流れが示されている。「T フォーメーション」と名付けられている。

これに続き中級（進んだ基礎、あるいは専門日本語基礎）レベル向けに『NIJ：A New Approach to Intermediate Japanese』が開発され、現在大阪大学国際交流センターのインハウス版として使用されている。知的言語活動中心の中級日本語教育として、NEJ の原理に則り、間テキスト性とバフチンの対話主義を取り入れると同時に、NEJ での「自己表現活動コンポーネント」に加え、「人間と社会コンポーネント」を設け、自立ユーザー水準の基幹日本語技量の習得を目指すものである。

しかし、西口氏は、新たな教育の創造とは、このような新たなカリキュラムや教材開発を行うことのみならず、むしろ、言語観やアプローチなどを理解し、実践できる人材を養成していくことではないかと提唱する。実際に国立大学の日本語教育には「教員養成」の教員と留学生センター等の日本語教育担当教員との連携があまりなされていないこと、そしてセンターの日本語教育担当の常勤と非常勤講師の間に意識のずれがあることなどの、新たな実践の創造を阻む制度的な問題があると指摘された。教育の改革には、専任教員がリーダーとして教育チームを牽引し、合理的で、学習者が学習可能な教育プラニングを行うことが必要ではないか、そのためには新たな実践創造のステップのプラニングも行い、教員相互がコミュニケーションをとる研修会や教育実践での協働を通して、新たなアプローチ、カリキュラム、教材や教育方法などを共有することによって、普及が可能となるとの見解が示された。それらの実践を、ご自身が実際に日々の教育で進めておられ、実に説得力のある、示唆に富んだ提言であった。